

【杉原邦生・瀬戸山美咲インタビュー】

ギリシャ劇に描かれていない、“空白の時間”を描き出す

これまでに『オイディプスREXXX』『 Greeks』と2本のギリシャ劇に取り組んできた杉原邦生が、今度はギリシャ劇をベースにしたオリジナル戯曲に挑みます。軸となるのは、アガメムノンの息子オレステスとその親友ピュラデス。ギリシャ劇には描かれない2人の物語を、瀬戸山美咲が想像力豊かに膨らませていきます。

「オレステスとピュラデスの話にしたい、ということは『 Greeks』上演中に思いつきました」と杉原。「2人はアポロンの神話によってギリシャから遠いタウリケに向かうんですが、その道中のことがギリシャ劇にはまったく描かれていない。『この2人はその間、何をしていたら？』と、すごく気になって。またギリシャ劇の主人公って英雄や超人的な人物が多いけれど、オレステスとピュラデスは普通の青年っぽさがある。その“普通さ”が、今新たな物語を作る時の突破口になるのでは、と思いました」。

杉原と初タッグとなる瀬戸山は、戯曲執筆のオファーに「びっくりしました」と述べつつ、「作家として参加する時は、自分ができないような演出をする方と組みたいと思っているので、邦生さんに演出していただけるのは面白そうだなと。また以前『アンティゴネ』を現代に翻案した作品を書いたことがあり、ギリシャ劇には興味があったんです」と意欲をのぞかせます。ただし今回は、設定がギリシャ劇の時代そのまま。「ギリシャ劇にはない物語を描くので、2人の“空白の時間”をそのまま考えたかった」と瀬戸山は狙いを語る一方で、「おかげでハードルは上がりましたね」と苦笑します。「ただ“人間の本質について”など、現代人はあまり言葉にしないようなことを全部言葉にするので、現代劇では書けないレベルのことが書けそうだなと思います」と執筆への手応えを語りました。

また恋とも友情とも取れるオレステスとピュラデスの関係について、杉原は「2人とも孤独で、自分1人では埋められないものを埋めるため、相手を必要としているのでは」、瀬戸山は「不安からの恐怖で相手との境界線が曖昧になり、2人で1つという気持ちになっているのだと思う」と分析。さらに杉原は、オレステス役の鈴木仁、ピュラデス役の濱田龍臣について「仁君は初舞台ですが、一度やった読み合わせで、演出を素直に受け止めてパツと反応できる方だなと。濱田君はベテラン俳優が多数出演する『大地』で、臆せず周りにも染まらずまっさらな感じで舞台上に立っているのがとても印象的でした」と語り、「稽古が始まったら、2人には“ドロドロに爽やかに”演じてもらいたいですね」とにんまりとした笑顔を見せました。



杉原邦生 (すぎはら・くにひろ) 演出家、舞台美術家。KUNIO主宰。ポップでダイナミックでありながらも繊細な演出により、新作から古典まで骨太な戯曲の本質を浮き彫りにしている。KAATではこれまで、KUNIO『TATAMI』『 Greeks』、KAATプロデュース『ルーツ』『オイディプスREXXX』、木下歌舞伎『勸進帳』を上演している。



瀬戸山美咲 (せとやま・みさき) 劇作家、演出家。2001年ミナモトを旗揚げ。2016年『彼らの敵』で第23回読売演劇大賞優秀作品賞を受賞、2020年『THE NETHER』で第27回読売演劇大賞優秀演出家賞、第70回芸術選奨文部科学大臣賞新人賞を受賞するなど、現実の事象を通して社会と人間の関係を描く作品で高い評価を受けている。KAATプロデュース公演には本作が初登場。



上:『オイディプスREXXX』(2018) photo by 富川舞子
下:KUNIO15『 Greeks』(2019) photo by bozzo

主催 10月10日(土) KAmE先行
10月17日(土) 一般発売

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース 『オレステスとピュラデス』

11月28日(土)~12月13日(日) | ホール

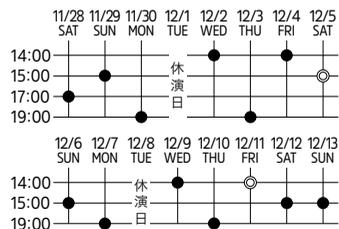
【STAFF】

作:瀬戸山美咲
演出:杉原邦生

【CAST】

鈴木仁 濱田龍臣
趣里 大鶴義丹
内田淳子 高山のえみ 中上サツキ 前原麻希 川飛舞花
大久保祥太郎 武居卓 猪俣三四郎 天宮良 外山誠二

【チケット料金(税込)】
全席指定 ¥6,800 ほか



◎=託児あり(有料)、公演1週間前までにマザーズ(Tel.0120-788-222)へ要事前予約。

家族の業、社会の影を鋭く描いた不朽の名作 長塚圭史演出×風間杜夫主演で待望の再演

2018年11月に上演された長塚圭史演出による『セールスマンの死』が、KAAT神奈川芸術劇場10周年記念プログラムの一作として待望の再演を果たします。

アメリカ現代演劇の旗手と呼ばれるアーサー・ミラーの代表作である今作は、60歳を過ぎたセールスマン、ウィリー・ローマンの死に至る最期の二日間



『セールスマンの死』(2018) photo by 細野晋司

を描いた物語で、1949年に初演、トニー賞、ニューヨーク劇評家賞、ピューリッツァ賞を受賞しました。

主人公ウィリー・ローマンは、初演に引き続き風間杜夫が演じます。社会に翻弄される老いと孤独を背負った男の悲哀がにじむ演技で観客の感動を呼んだ演技は必見です。また、その妻リンダ・ローマンを片平なぎさ、長男ビフを山内圭哉、次男ハッピーを菅原永二、ウィリーの友人チャーリーを大谷亮介、ウィリーの兄ベンを村田雄浩ほか、加藤啓、智順ら初演時の演技が高く評価されたオリジナルキャストが集結しました。

さらに新キャストに土屋佑壱、山本圭祐、佐野瑞稀、浜崎香帆(東京パフォーマンスドール)が加わった今回の再演に際し、演出の長塚は「理想の座組で時間をかけて作り上げた『セールスマンの死』を再演できることを心より嬉しく思います。新たな出演者と共に、精度を高めてお届けしたいと思います。ウィリー・ローマンは時代が生んだ怪物です。70年以上経っても全く色褪せないのは誰しもがウィリーの影を抱いているからです。恐ろしいスピードで拡大していく経済と技術に振り落とされた名もなき男の誇り高き人生と、彼と向き合った家族の葛藤。また大きく社会が変質する中でアメリカ現代演劇の金字塔がその普遍性をどのように響かせるのか。ご期待ください」とコメントを寄せています。

初演では、今の時代にも響く戯曲の現代性、普遍性を鮮やかに浮き彫りにした長塚の演出が印象的でした。世界的に激動の年となった2020年を経て2021年1月、私たちはこの作品の普遍性に“今”のどんな姿を見出すのでしょうか。

主催 11月21日(土) KAmE先行
11月28日(土) 一般発売

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース 『セールスマンの死』

2021年1月8日(金)~12日(火) | ホール

【STAFF】

作:アーサー・ミラー
翻訳:徐賀生子
演出:長塚圭史

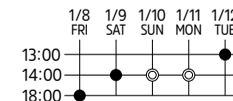
【CAST】

風間杜夫 片平なぎさ 山内圭哉 菅原永二
加藤啓 土屋佑壱 智順 山本圭祐 佐野瑞稀 浜崎香帆
大谷亮介 村田雄浩

【チケット料金(税込)】

全席指定 S席¥8,500 A席¥6,000
U24チケット(24歳以下)¥4,250 高校生以下割引¥1,000
シルバー割引(満65歳以上)¥8,000

※厚木・岩手・松本公演あり



◎=託児あり(有料)、公演1週間前までにマザーズ(Tel.0120-788-222)へ要事前予約。